

留学生の視点から山形の良さを発信

—山形県における留学生の地域貢献—

Transmitting the Attractiveness of Yamagata

through the Eyes of International Students:

Contributing to the Locals of Yamagata Prefecture

山形大学工学部国際交流センター准教授 仁科 浩美

NISHINA Hiromi

(Yamagata University, Faculty of Engineering)

キーワード：留学生交流拠点整備事業、地域貢献、多文化共生

1. はじめに

高齢化や人口の減少とともに、労働人口の減少は避けられない状況にある。特に地方においてそれは深刻である。一方で、ものづくり産業においては、グローバル化が急速に進み、外国との連携が欠かせない。地方の中小企業においても東アジア、東南アジアへ進出し、現地の人々といかにうまく関係づくりを行うかが重要な課題となっている。また、近年では、2020年の東京オリンピック開催を見据え、地方にも観光客を呼び込む、あるいは、外国人観光客の誘致に成功した先行例を真似て、積極的に取り組もうとする試みが各所で行われており、山形県も例外ではない。

本学では、大学院理工学研究科ものづくり技術経営学(MOT)専攻において、経済産業省及び文部科学省の委託事業であった「アジア人財資金構想」を基に留学生限定の「とうほく MITRAI コース」を設置し、県内企業への就職を目標とした留学生育成に努め、毎年確実に留学生を県内企業に送り出している。さらに、県内で学ぶ各大学の留学生に対し、山形県留学生交流推進協議会や山形県が協力し「外国人留学生のための企業合同説明会」も毎年開催し、優秀な人材の確保にも力を入れている。

山形県に住む外国人は、山形県の調査¹⁾によると、平成25年末現在6,031人(女性4,698人、男性1,333人)で、県の総人口に占める割合は0.53%にすぎない。しかし、今後の産業・教育等のあらゆる面でグローバルな展開への対策が急務な現在、未来を担う学生はもとより、一般市民においても山形に住んでいる外国人と触れ合う時間を増やし、異文化について互いに理解し合う環境が必要である。このことを考えると、外国人が少ない地方において、留学生が地域に向けて果たす役割は都市部より一層大きいものがある。

本報告では、平成24年度・25年度に文部科学省より委託を受け実施した留学生交流拠点整備事業の一部分、留学生の能力を活用した地域への貢献について述べる。

2. 山形における留学生交流拠点整備事業の概要

山形における本事業では、日本社会の長所・短所をよく理解し、日本への愛着を持ってグローバル社会で活躍できる人材を育成することを目的とした。これを達成するため、①仕組みづくり、②地域・日本人との交流、③就職支援、④留学生の能力を活用した事業の4つの柱を設けた。①では留学生の支援を行うための基盤となる体制を産学官地がこれまで以上に密に連携を取りながら整えていくこと、②・③では、留学生に日本社会への理解を求めるとともに、日本人学生に対しても留学生同様、協働作業を通して共に同じ目標に向かう中で学びを得ること、④では多様な国からの留学生の力を地域に生かし、グローバル化に向けた日本人側の意識づくりの一助となることを目指した。次章では、④留学生の能力を活用した事業の具体的事例を3つ紹介する。

3. 留学生の能力・視点を活用した地域貢献

(1) 地元新聞社と連携した留学生エッセイ

山形県において世帯普及率 51.2%^{注1)} という地元紙として非常に親しまれている「山形新聞」に「YAMAGATA 留学生んだ！！んだ！？」（「んだ」は「そうだ」の意味）と題し、留学生のエッセイを平成25年6月から平成26年3月末まで計38回にわたり掲載した。700字前後で書かれたエッセイは、一定の紙面を割いて週1回掲載された。エッセイは外国人が考える山形・日本の良さ、あるいは疑問を県民に伝え、読者が山形を新たな視点から再考することを大きな目的とした。執筆をしたのは、山形大学・東北芸術工科大学・東北文教大学・鶴岡高等工業専門学校の山形県内に住む21か国・地域、38名の留学生である。執筆にあたっては、単に留学生生活を振り返ったり、周囲に感謝を述べたりするだけで終わるのではなく、伝えたいテーマを絞って具体的に書くよう指導した。当初、山形と言えば、「雪」「地方」「親切」といった内容が重なってしまうのではないかと心配したが、留学生らは実に豊かな感性を持ち、様々な体験をユニークな視点から書いた。エッセイの内容は、日本人が漫然と日々暮らしては気が付かないことばかりで、留学生ならではの非常に興味深いものとなった。

執筆者の国と新聞での見出しの一部を表1に示す。また、実際に山形新聞に掲載された記事を図1に掲載する。

内容のいくつかを紹介すると、エッセイには日本独特のコミュニケーションスタイル・相互理解のあり方や、他人を思いやる考え方に感動した話、異なる食文化、学校文化に驚きつつもそれを積極的に楽しみ、受け入れようとする姿等が描かれている。さらに、頻繁に尋ねられる外国人への質問に対し、少々皮肉めいた回答なども現れ、読んでいて「なるほど」と納得させられるエッセイも見られた。

山形にも数多くの国からの留学生が生活しており、身近なところでグローバル化が進んでいることを、世代を越えて多くの人々に知らせるためには、新聞という媒体の活用は非常に有効であった。新聞を読んだ読者の方からは、「祖母が毎週楽しみにしている」「この間の学生さんのはよく書けていた」

表1 留学生の出身国と新聞の見出し(一部)

出身国	見出し
ベトナム	あいさつが”潤滑油”に
中国	国会生中継 とても新鮮
韓国	日頃の努力で美しく
オランダ	国は違っても人は同じ
シンガポール	胸張って方言使おう
中国	便利さより善良な心
ラトビア	作家の夢 応援勇気に
米国	芭蕉の気持ち 受け継ぐ
中国	海外で知る母国の良さ
モンゴル	楽しみたい日本の食文化
中国	助け合うこと 心に刻む
ミャンマー	震災時の日本人に感動
ベネズエラ	ズルズル 夢のラーメン
ロシア	日本の暖房は面白い
ロシア	サッカーで‘弱さ’を克服
スリランカ	人の温もり 冬場に実感
韓国	苦情の伝え方にも配慮
ホンジュラス	四季の素晴らしさ実感
韓国	和菓子に生き方を学ぶ
マレーシア	女性の面前で男が着替え!?
中国	高校部活 うらやましい
ボリビア	ボリビア日系人からみた日本の生活
タイ	同じようで異なる食文化
中国	「～てもらう」を多用する日本語表現

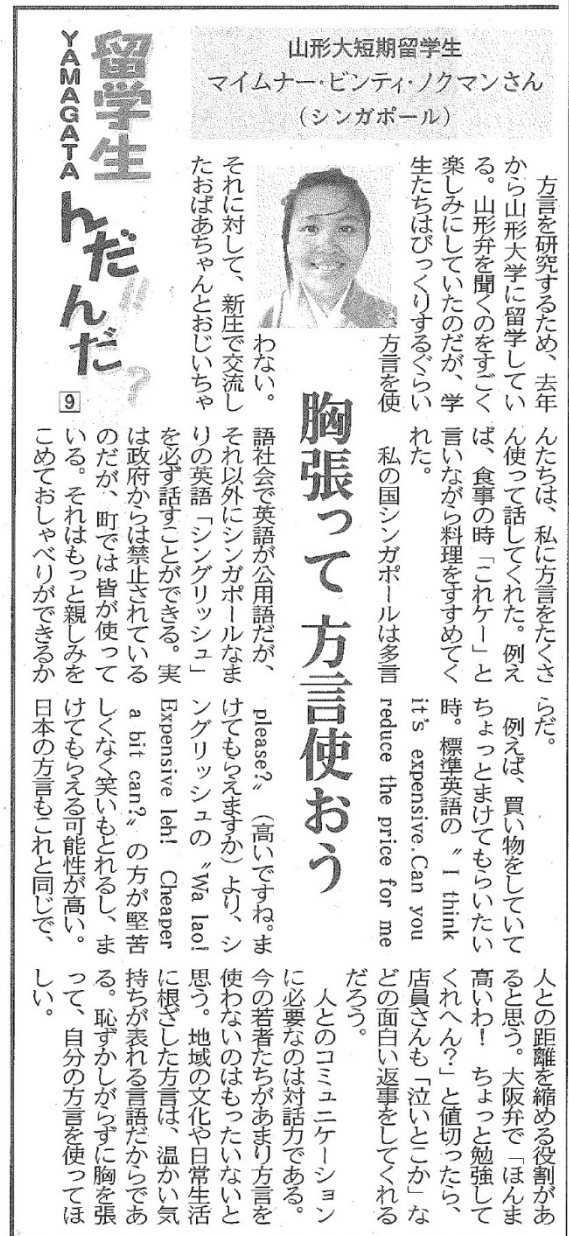


図1 山形新聞(平成25年8月5日)に掲載されたエッセイ

「物の見方が面白い」といった感想をあちらこちらからいただいた。さらに、自分が海外で暮らしていた時の経験を重ね合わせ、困難に負けず頑張るようにと、励ましの便りを留学生宛に頂戴することもあった。エッセイには山形の地名や場面が度々登場し、親近感を持って読んでもらうことができた。新聞への留学生エッセイ掲載は、県内に多くの留学生が山形の地に共に生活し、異文化にさまざまな思いを持ちながら元気に暮らしていることを実感するのに絶好の情報提供の場となった。

一方、留学生にとっても、新聞というメディアを通して社会に自己の考えや思いを発信できるという貴重な機会を得たことは、非常に大きな励みとなった。普段以上に日本語の表現に気をつけながら、

自分の考えを何度も書き直しまとめた。

山形新聞へのエッセイ掲載は平成 25 年度末をもってひとまず終了することになったが、予想以上に内容豊かで、かつ、好評であったため、大学の助成を受け、日本語と英語を見開き対照にした冊子にまとめることになった。作成に際しては、山形新聞社及び執筆した全留学生の了解・承諾を得た後、作業が開始された。38 本のエッセイは、「留学生エッセイ ヤマガタの空の下」(103 ページ、非売品)と題し、「自然・環境」「コミュニケーション」「人との出会い」「食べ物」「努力」「日本と母国」「日本人からの質問」の 7 つのテーマに分けて、編集・収録された(図 2、図 3)。完成後は、県内企業、海外協定校、国際交流関係機関等に送付し、山形を留学生の目線から理解してもらうための資料として活用している。また、日本語及び英語 2 か国語での掲載となっているため、英語学習教材としての活用も可能なものとなった。エッセイが冊子としてまとめられたことも山形新聞に取り上げられたため、教育機関や国際交流に関心のある市民から問い合わせがあり、送付した。

留学生エッセイは、新聞社から継続の要請もあり、平成 26 年 7 月に第 2 弾が開始され、現在も週 1 回のペースで山形の人々に日本や山形の新しい一面への気づきを提供している。

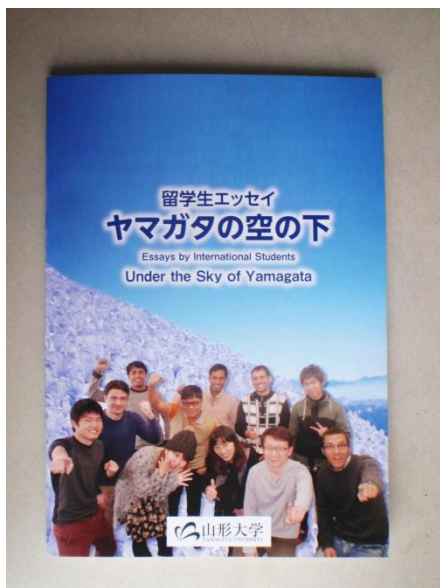


図 2 エッセイ冊子本の表紙

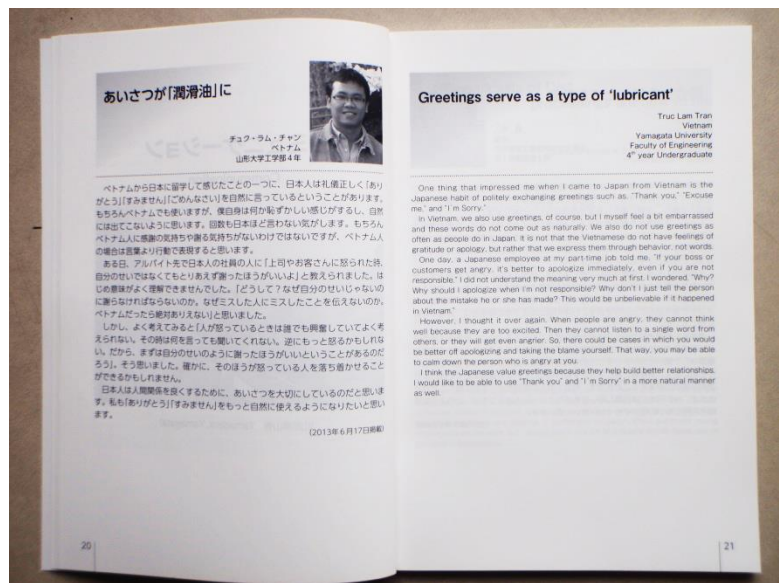


図 3 ページ掲載例(左頁に日本語、右頁に英語で記載)

(2) 山形魅力発見カレンダー

近年、外国人観光客を地方へ迎え入れようとする動きが高まっており、成功例もいくつか聞かれている。山形県においても、海外からの誘客推進や、外国人観光客受入態勢の整備等に力をいれているところである。山形県商工労働観光部の外国人旅行者県内受入実績調査²⁾によると、平成 25 年度の受入延べ人数は、約 5 万人で、前年比 133% 増であるが、震災前と比べると 51.7% の減で、原発事故等がまだ大きく影響していることがわかる。

これまでの観光紹介は、日本人製作者の視点でまとめられたものが多く、外国人から見ての面白さに欠けているとの指摘が外国人居住者からあった。そこで、留学生が山形県内の興味・関心あるもの、

あるいは、自国の人々に紹介したいものを自らの足で訪ね、地域の人々と交流しながら、その素晴らしさを専用のサイトから発信する活動を約1年にわたって企画・実施した。取材は、県内の留学生が在籍する教育機関に呼びかけ、実行委員メンバーを募り、大学の講義・実験・試験等がない週末に実施された。したがって、祭りの時期や開花の時期にタイミングが合わないこともあったが、この活動においては写真には表れない取材時の地元の人々との交流にも意義があると考えた。留学生だけで行動する取材であったため、質問に快く応じてもらえる場合もあれば、そうでない場合もあったようだが、遠い外国から来た留学生であることがわかると、初めて会った人々に留学について逆に質問されたり、励ましを受けたりし、山形の人々の優しさに触れる多くの体験を味わうことができた。また、観光客として来日した外国人旅行者に留学生がインタビューする機会もあり、日本に住む外国人として旅行者らを迎える感覚も体験した。取材では、天候や電車事故等、思いもかけないアクシデントで計画していたとおりにいかないこともしばしばであったが、その都度、ここでどのような行動をとるのが最善であるのか、メンバー間で話し合い、臨機応変に対応することができた。これも留学生には大きな成長となった。取材後は、専用ウェブサイト (<http://www2.yz.yamagata-u.ac.jp/exchange/core/ja/index.php>) に記事及び写真をまとめ、日本語・英語・中国語・スペイン語の4か国語で発信した。

そして、この活動も前述の留学生エッセイ本と同様、留学生が取材してきた数々の写真が非常に素晴らしい出来映えであったため、さらに有効活用しようと考え、翌年度のカレンダーを作成することになった。数多くの写真の中から、各月の担当留学生にその月のベストショットを1枚選定させ、「留学生が歩いた山形の四季！ 山形魅力発見 2014 CALENDAR」と題したカレンダーを作成した（図4）。

表2 山形魅力発見カレンダーの各月の内容

4月	南陽市 烏帽子山千本桜
5月	山形市 山寺
6月	山形市 山形市郷土館（旧済生館本館）
7月	米沢市 東北花火大会
8月	新庄市 新庄祭り
9月	鶴岡市 由良浜
10月	新庄市 最上川 舟下り
11月	米沢市 干し柿作り
12月	上山市 上山城及び上山温泉
1月	山形市 山形蔵王
2月	米沢市 上杉雪灯籠まつり
3月	新庄駅 山形新幹線



図4 カレンダー表紙と10月のページ

表2に各月に取り上げた県内の取材先を示す。カレンダーは、留学生の採用に関心を持つ山形県内企業、国際交流関係団体に送付し、留学生が発見してきた山形の魅力を国内外に伝えた。

(3) 被災地ボランティア活動

平成23年3月に発生した東日本大震災後の復興に向けての取り組みは、今日報道等ではあまり触れられなくなってきたが、その復興作業・支援は順調に進んでいるとは言い難い。山形に住む留学生も「フクシマ」は知っていても、津波の被害や仮設住宅の現状を直接自らの目で見、知る者は少ない。同じ東北で生活をする者として、自分たちもなにか被災者の力になることができるということを自覚するために、現地の方との交流を行うとともに復興の現状を理解する活動を3回行った。

1回目は山形県内の大学に在籍する日本人大学生と協働で行った。水産加工場の汚泥にまみれた機材の洗浄作業では、異文化コミュニケーション能力の難しさを感じながらも、共に同じ目標に向かって力を合わせることを両者が学んだ。

また、2, 3回目の留学生のみで参加したボランティア活動では、留学生だからこそできる自国のダンスや楽器演奏、日本で先輩留学生から習った南京玉簾等を披露した。プロではない素人の出し物ではあったが、留学生が外国文化を紹介することで、非日常的な異空間を提供し、つかの間の安らぎの時間を味わってもらうことができた。被災地の皆さんに温かく受け入れていただき、予定していなかった追加公演を行わせていただくこともあり、その後の交流会も笑い声があちこちから聞かれた。

4. おわりに

本学の留学生交流拠点整備事業としての活動は平成25年度で終了したが、活動の多くが現在も継続して行われている。また昨年度・一昨年度の活動が縁となり、その輪が広がって留学生への協力依頼も数多くいただくようになった。

地域の人々が留学生との出会いをきっかけに、異なる文化を持つ者への抵抗が減り、新たな存在意義を見出してもらえれば、日本人側にとっても留学生にとっても今後のグローバル社会を考える上で、非常に明るい期待が持てよう。

留学生についても、単に外国の情報を伝える留学生という存在から、生活者、市民・県民の一人として受け入れられ、地域に深く根差して活躍する人材になってほしいと考える。

注

1) 山形新聞 媒体資料 http://yamagata-np.jp/ad/medium_document.html

【参考文献】

- 1) 山形県商工労働観光部観光経済交流局経済交流課国際室『山形県の国際化の現状』(2014)
- 2) 山形県商工労働観光部観光経済交流局経済交流課「平成25年外国人旅行者県内受入実績調査の結果について」(2014年8月)

<http://www.pref.yamagata.jp/ou/shokokanko/110011/kankotokei/gaikyakudata/gaikyaku25kakutei.pdf>